

人生はつかの間、風の歌を聴け

余韋瑋

あらゆるものは通り過ぎる。誰にもそれを捉えることはできない。僕たちはそんな風にして生きている。

——前書き

日本の文学に言及するなら、村上春樹の名は避けて通れるものではありません。東野圭吾、川端康成がどれほど好きだろうとも、村上春樹を見ながら見ないふりをすることはできません。彼の作品がとくに海を渡っており、タンポポのように広い世界で根を下ろし芽吹いているからです。かなり前から村上先生のお名前はうわさに聞いていましたが、古い観念の大きな山（自分は文学の大家の本を読んでも分からないと感じる）が横たわっていたので、村上先生の作品を読むのが遅くなりました。ある年の誕生日、友人が何気なくくれた本を一目見てはっと気づいたのです。

この小説は村上先生の作家生活のスタートで、自分が初めて知った作品でもあります。小説の内容はとても平凡で、夏にある少年と少女が知り合うというものです。言葉遣いが率直、流れもシンプルで、曲折や起伏がありません。語調も淡々としているのですが、なんだかすっきりせず、その引っかかりが何かを表しているようです。誰しも青春時代に経験する矛盾のように、知られたくはないのに理解を渴望するもののような。

初めてこの本を開いたのは、高校に入った年でした。ぼんやりしていた自分は恋愛を渴望しており、作中の少年のように、好きな女の子に近づきたいことははっきりしているのに唯々諾々としていて、失ってからそのことに気づきました。愛していてもできない憂いと悲しみを味わうことしかできなくて、心痛は言葉に表せないものでした。ちょうど村上先生が「僕は夏になって街に戻ると、いつも彼女と歩いた同じ道を歩き、倉庫の石段に腰を下ろして一人で海を眺める。泣きたいと思う時にはきまって涙が出てこない。そういうものだ。」と書かれたように。

二度目にこの本を開いたのは、三年のときでした。大学入試に失敗して、生活の苦痛に耐えていた自分は、またぼんやりとこの本を読んだのです。当時は憂いも悲しみもなく、後悔の心情でした。作中の少年が大事な少女を失ったように、自分も人生で一番大事な転機を失いましたが、自分を慰める術が身につきはじめていました。逃したものはもう取り戻せないことも少しずつ分かってきました。たとえ力を尽くして求めても徒労は徒労です。大学入試に失敗した無念さは永遠に存在するかもしれません。ちょうど作中にあるように「しかしそれはまるでずれてしまったトレーシング・ペーパーのように、何もかもが少しずつ、しかしとり返しのつかぬくらいに昔とは違っていた」のです。

三度目にこの本を開いたのは去年でした。高校の本を片付けていたとき偶然に書棚の隅で見つけ、一枚一枚なじみのある紙をなでて、だんだんその中に浸っていきました。一章また一章と読み進めるうち、自分の昔の純真さに感慨を覚え、失敗した時の悔恨に感嘆しました。村上先生が執筆するときもかつての自分に思うところがあったのかな、とよく思うようにもなりました。

「今愁いの滋味を識り盡くし、説かんと欲すれど還た休み。説かんと欲すれど還た休み、卻って天涼しく好き秋と道う」〔訳注：ここは村上作品と関係なく辛弃疾（1140-1207）の『醜奴児』の一節です〕人生を振り返ってみると、大したことはありません。遠出した日のことをまだ覚えています。雑用を放り出して、こぎれいな戸口にたたずみ、緑茶のグラスを揺らして過ぎた時間を思い、心をリセットしました。心に絡みついた煙のような昔のことを捨て去って、すべての悩みを忘却し、心の扉を開け放して、最後にこの本の物語を味わってみると、ぼんやりしているうち、勇気を奮い起こして告白する少年が目に見えかけました。涙を浮かべて失敗に向き合う少年、過去を笑いながら気づかぬうち涙にむせぶ少年が。夜が更けて人が寝静まったころ、友人から電話があり、本の中に浸っていた自分は我に返りました。だからしゃべるうち、友人に近況や今の気持ちを訊かれ、人生はつかの間だと言いつつ切ろうと思いました。しかし、彼が想像を通じて私の張り裂けた心を継ぎ合わせるはずはありません。でも、この長い夜が通り過ぎた景色を変換することはないことは分かっています。二度とペン先を騒がせることもありません。昨日の話を繰り返すことしか、友人に質問される空間にいることしかできないのです。孤独で寂しい気持ちをペン先に付け、ぼんやりとした追憶を書きます。贅沢で享樂的な都市の真ん中で、生活に鋭気を削がれた自分は、青春の情熱と勢いを取り戻すことはなく、のんびりした生活を望むようになってきました――暑さ寒さをしのげる質素な家。中にはじゃれついてくる犬や猫。こまごましたことが無数にあり、開けた道はなく、冬には酒を飲んで、雨の夜には安眠するような。

席慕容の言葉に「青春はあまりに慌ただしい本だ」というものがあります。過ぎていく青春は、茫漠として、頑固で、浪費する歳月で、しなやかでゆったりとしているのに心の扉をノックしてきます。今日に至ってもなお、この本の最も分かりやすい道理を味わうことしかできなくて、本当に村上先生の表現したいものを体得することはできていません。しかし作中の場面は鏡のように、ぼんやりと私自身の姿を映しています。

最後に、この本の最も好きなフレーズで結びたいと思います。「幸せか？と訊かれれば、だろうね、と答えるしかない。夢とは結局そういったものだから」。人生はつかの間、『風の歌を聴け』を味わってみてください。